

# まなぶごし 第110号

「道」

中央幼児センター父母と先生の会 会長 大田 学

2018年7月末、私は20年間勤めていた仕事を辞めた。新しい道に進む為だ。これにより子供とふれあう時間が急が増えた。今まで不定休の週休一日、子供の休みと合わない事もしばしば。仕事が終わりに家に帰ってからの子供が起きている三〜四時間が唯一のふれあいの時間であった。今は、夜こそ時間はないが、自営業という事で自由が利き、休日も必ず一緒に過ごすことができる。

子供との時間は、楽しいが半分、疲れるが半分。とにかくパワーが必要である。今まで上の子供にはしてあげられなかった事をしてあげたいと思い、自分が平日休みには下の子三人連れて温泉に行く。まるで何かの禊ぎのようである。

私は今、長男と仕事をしている。高校を出たばかりでまだまだ仕事に対しての甘えがある事でよく口喧嘩をするが、これも私にとって大事な時間なのだ。将来子供達がどんな道を歩みたいと言うかはわからないが、一つの選択肢として店を続けられたらと考

えている。

店には、高校生がよく来てくれている。男友達、女友達やカップルなど形体は様々だが楽しそうだなと思う反面、うちの子達もすぐ大きくなるんだなと少し寂しい思いになる。幼少期は常に一緒にいるのが当たり前だが、中高生になると親との時間より友達との時間をとるようになり、進学就職となり年に何回かしかな顔を合わせなくなってしまうだろう。これを考えるのと、子供との時間なんて本当に限られた時間しかないのである。



子供とのふれあいの時間、当たり前のようにでなかなか難しい時間。「なん

でもないようなことが幸せに思える」、そんな時間こそが大切なんだと切に思う。九人家族で家の中は常に騒がしく、至るところで喧嘩の毎日、「う

## 「教育は人なり」の精神を大切に

共和中学校 校長 田中 仁史

本校に着任して三年が経ちました。私が若い頃には共和中学校は、「後志の学習院」と評されるような文武両道に長けた優秀な学校と聞いていました。しかし、どこの中学校も経験したように、本校も数年前には生徒指導面で随分と荒れた時期がありました。その逆境も当時の先生方の努力や生徒たちの頑張り、以前のような落ち着きのある共和中学校を取り戻すことができたと感じています。

ですから、私が赴任した頃には、ほぼ正常な教育活動を営める状態でした。しかし、嵐だった時には見えなかった水底が、風になったらよく見えるように、生徒たちの新たな課題が浮き彫りになりました。それは元気の挨拶であったり、生き生きと過ごす学校生活だったり、学習意欲であったり、子どもたちが明るく快活な学校生活を送るために不可欠な要素でした。そして、共和中学校を以前のような活気ある学校に変容させようと、先生方の努力が始まりました。

挨拶については、先生方が毎朝玄関ホールで登校する生徒への声掛けを

るせー静かにしろー」といつも怒っているが、これも後から考えると幸せな時間なんだろう。しかし、うるさいものはうるさい。

始め、今では生徒会の取組みとして発展し、定着しています。また、学校生活を生き生きと過ごすための取組は、学校行事など仲間と協力することで得られる喜びや達成感を経験させ、頑張りや努力を評価して自信や意欲を引き出す意図的な取組を継続的に進めています。



そして、学習意欲では、学力に不安のある生徒でも取り組める課題を与えて発表場面を提供し、グループ活動で自分の意見が述べられる場面を設けて、必ず学習に参加できる機会を設定しながら学習意欲の向上に努めています。今では、三年生が基礎的な分野を補充したいと放課後に居残って

勉強に取り組む生徒も少なくありません。

子どもを豊かに育て、能力を引き出すことができるのは教師という人間によるものという「教育は人なり」という言葉があります。私はこの三月で

## 東陽小の日常的「インクルーシブ教育」

東陽小学校 教諭 戸内 康貴

「インクルーシブ教育」ってご存知ですか。なかなか耳にすることは無いワードかもしれませんが。インクルーシブ教育とは、「障がいのある子どもを含むすべての子どもに対して、子ども一人一人の教育的ニーズにあつた適切な教育的支援を行う」ことです。

東陽小学校には、特別支援学級が二学級あります。主に、国語と算数は、個々の実態に応じて、個別支援を受けて学習に取り組んでいます。それ以外の学習は全て、交流学习で一緒に学んでいます。そこでは、支援学級の先生だけが支援にあたるのではなく、交流学級の先生も支援学級の子どもの特性をよく理解した上で進んで支援を行ってくれます。また、交流学級の子どもたちも何の壁を作ることもなく、ただただ仲間という自然な意識の中で「ナチュラサポート」で関わってくれます。さらには、東陽小学校の全職員、全ての子どもたちにも「ナチュラサポート」の輪が広がり、それが当たり前の「日常」となっています。

退職を迎えますが、先生方はこれからも「教育は人なり」の精神を大切に子どもたちを教え育み、共和中学校をもっと輝く学校に発展させてほしいと願っています。

す。

この「日常」を支えている陰には、多種多様な子どもたちを「一人一人のステキな個性」としてお互いに理解し合い、「チーム支援」で子どもたちと日々関わっている先生方の姿があります。そんな先生方の姿が子どもたちにも見本となって伝わり、東陽小オリジナルの「インクルーシブ教育」につながっているのだと実感しています。



障がいのあるなしに関わらず、多角的・多面的な視点で子どもたちを捉えながら、児童一人一人に適した指導・支援を行っていくことが重要な時代

になったのだと感じています。東陽小学校での「チーム支援」&「ナチュラサポート」が今後、地域にも広がり、

## 火花散る一瞬

共和高等学校 教諭 高橋 真央

浸透し、そして共和町の文化として根付いていくことを願っています。

突然ですが、皆さんが「火花散る一瞬」とは、どのような時でしょうか。これは私が最近、ある本を読んだときに、心に残ったフレーズです。著者は、日産自動車で働いた経験もあり、そのときの上司から自動車工場で言われたそうです。「ロボットが溶接を行っているときのある火花が散る瞬間、このときのみ価値が生まれているのだ。」と、端的に言えば、自分の仕事の中で、「価値が生まれる」瞬間のことです。瞬間の表現は、個人によって異なりますが、どのような職業でも、「火花散る瞬間」があるはずですよ。

私は春に大学を卒業し、社会人一年目を共和町でスタートしました。では、教育現場において「火花散る一瞬」とは、いつなのか。授業がうまくできるときや、何かのミッションが成功したときなど状況は様々です。その中でも、生徒の成長を感じたときこそ、「火花散る一瞬」と言えます。

今年のかかし祭では、東陽小学校と合同でダンスとよさこいを披露しました。ダンス練習では、最初は恥ずかしさもあり、動きも硬く、なかなかダンスに馴染めず、意欲も欠けていまし

た。しかし、それぞれが、動画を撮って動きを確認し、仲間同士で教え合う姿や、放課後を使って取り組み生徒も現れました。また、徐々に自らが主体となつて取り組み、自分達の行動にも責任を持ち、積極的な姿勢へと変わっていききました。生徒の成長を感じた瞬間でした。



私は社会人一年目ということもあり、まだまだ未熟者ではありますが。これからも、生徒の能力・技能にあつた授業を心がけるとともに、未来ある生徒の無限の可能性を大いに引き出し、導くことができるよう、「火花散る一瞬」を求め、日々、思考し追究していきたいと思えます。